

命を守る選択ができる大人に

いつも自転車で登校するM君が、昨日いつもと違う赤色のヘルメットをかぶって、私の前にやってきました。色はともかくとして、サイズが小さく、ヘルメットが頭にちよこんと載っているだけ。両側のおごひももちろん届きません。転倒すれば、飛んでいってしまうことは必至でした。

学校に戻ってから、私は担任を通して彼を校長室にさせました。

「いつものヘルメットはどうしたの？」

「(月曜日の)雨で濡れてしまったので……。」

「そうかあ、でもさ、ヘルメットは本来命を守るためにかぶるものだからね。あの赤いヘルメットでは命は守れないよ。自転車に乗るときにはヘルメットをかぶらなければいけないと強く思っていたから、代わりにヘルメットをかぶってきたんだね。それはOK！これからは、なぜヘルメットをかぶるのかを深く考えてみるといいね。私なら、命を守るためには、濡れていてもいつものヘルメットをかぶってくるなあ。」

彼は素直に私の話を聞いていました。いつもヘルメットをかぶっている彼ですから、叱るつもりは毛頭ありませんでした。むしろ、いつものヘルメットをかぶらなかつたその日に事故に遭っては彼が不憫(ふびん)だと思い、私は防災用の折りたたみヘルメットを貸しました。下校時、彼は私が貸したヘルメットをしっかりとぶり、元気よく「さようなら！」と言って帰って行きました。

翌日、彼は少し遅れて登校してきたので、校舎内で彼に会いました。彼は私を見るや、「校長先生、ありがとうございました。」と言ってヘルメットを私に手渡しました。

「今日はいつものヘルメットをかぶってきたかい？」

「はい！」

「よし！よし！」

赤いヘルメットをかぶって登校した朝に、彼が事故に遭わなくて本当によかったと思います。中学生は半分子どもで、半分大人。命の大切さは理屈ではわかっていますが、体裁や形式に妙にこだわって、大切な部分を見落としがちです。彼らが車を運転できるようになったとき、罰金や減点があるからではなく、自分の命を守るためにシートベルトを着用できる大人になってほしいと強く思っています。(九月二日 記)

